

に母親と二人の子とも、生まれたての赤ん坊がいたことがわかりました。恐ろしいことです。白髪を風になびかせた老人はいつまでも立っていました。指揮官はドロの肩を叩いていました。カカベの小屋を、「攻撃的だ」といっているのですが、それはどう見てもたまたまの平和な村落でした。ほくほく、自分自身にも、ほくの仲間にも、祖国にもとういり誇りを持つことではできません。(米誌「プログラム」一版片写)についた朝バトナ